

# 海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

1984 6

- 岩田喜雄理事長を偲ぶ 橋本栄一
- 岩田喜雄氏その生い立ちの記 小林一彦
- 戦後の経済協力と岩田喜雄氏 大戸元長

## 追悼・岩田喜雄理事長

岩田喜雄理事長を偲ぶ (社) 海外農業開発協会会長 橋本栄一 ..... 2

岩田喜雄氏その生い立ちの記 (社) 海外農業開発協会常務理事 小林一彦 ..... 3

——1889～1916年

どこの「馬の骨」? 人のよい

父、心の強い母 家を継ぐ立

場 海外雄飛の夢 卒業論

文『果栽培論』 図南の決意

別れ 初めてのシンガポー

ル ジョホール河畔の日本人

ゴム園 老化演技 苦闘の

日々 抗議 母の死

蛮勇の再出発

戦後の経済協力と岩田喜雄氏 (社) 海外農業開発協会専務理事 大戸元長 ..... 14

——アジア協会～アジア会館～OTCA

はじめに 1. 戦後の苦悩

2. 経済協力と賠償への参画

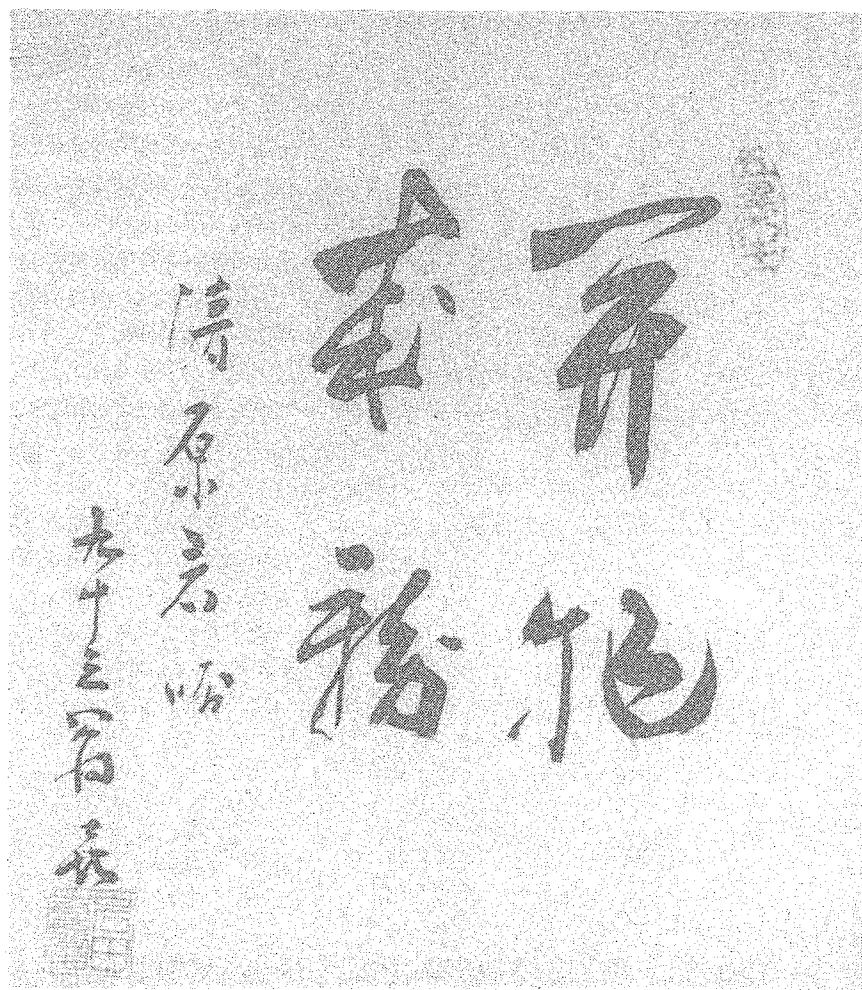
3. アジア協会とアジア会館

4. 海外農業開発財団の設立

5. 農業開発事業への執念

■ 岩田喜雄氏略歴 ..... 22

故 岩田喜雄理事長の書



「物を開くを務めと成す」

この言葉は、維新の前夜、「七卿落ち」の一人、東久世通禧が、伊藤博文に与えた書の中にあり、岩田理事長が生涯の座右の銘としていた。

(財)協和協会常務理事清原淳平氏に贈呈された書。氏のご好意により掲載。

岩田喜雄理事長を偲ぶ

## 岩田喜雄理事長を偲ぶ

(社)海外農業開発協会会長 橋 本 栄 一



岩田さんがゴム園の開設・経営にあたられるために南方へ第一歩を印したのは、大正の初めであったという。日清・日露の戦勝の影響もあって、日本に安住するのを嫌うというか、男子と生まれたからには、海外へ雄飛するといった気風が盛んな時代であった。

私も学生の時分から海外志向をもち、卒業したら南米の天地で力いっぱい仕事をしてみたいと思って、三井物産に入社したものである。同じ凶南者でも、岩田さんは千葉の園芸学校で学ばれた知識を活かし、南方の地に根を張るつもりでゴム園の仕事に就かれたときいているが、私は商売の舞台のひとつとして、この地に赴いたのである。

当時、ジャワなどで農園経営をしていた西本願寺の大谷光瑞さんも南方で農園経営を成功させるには、日本であぶれたような三流の人間ではいけない、エリート中のエリートが必要である——そんな考えで頭脳明晰、容姿端麗な青年を集めて連れて行かれた。

人材そのものに優秀さが求められるという認識は、岩田さんも大谷さんと同じだったのではない。ただ大谷さんは理想を高く持たれてはいたが、やはり宗教家であり農業の専門家ではない。ましてや、そこは熱帯の地である。日本とは異なる環境の自然を相手にする農業である。農業の基礎的な知識はもちろんのこと、健康な身体と強靱な精神をも兼ね備えていなければならない。大谷さんの農園事業が失敗に終わった原因のひとつには、これらの点での考慮が欠如していたように思われる。実際、当時の農園生活というのは、やってみるとわかるが、全く俗界とは縁を絶ったような生活だった。岩田さんは、最初からそういう場所に入るのだという知識に裏打ちされた覚悟ができていたのであろう。

私が初めて岩田さんを知ったのは、昭和7年の暮れにジャワへ転勤し、ゴムの取り引きに携わった時である。当時、マレー、ジャワ、スマトラには日本人所有のプランテーションがかなりの数あった。三井関係では、マレーに「熱帯産業」、ジャワには私自身も仕事をしていた「南国産業」があった。

私がジャワに赴任した当時、岩田さんが経営にあたっておられたのは、「昭和ゴム」の前身である「スマトラ興業」で、40歳を少し超えたばかりの岩田さんは、すでに現地で一家を成し、地道に農園事業に取り組んでおられた。「南国産業」もゴムだけではなく、ココア、コーヒー、紅茶の栽培事業を行っていたので、同業の関わりもあって「スマトラ興業」の事業内容には当然ながら関心をもっていた。同社の農園事業を指揮する岩田さんの仕事ぶりと名前を非常にインプレッションに頭に刻み込んだのを今でもはっきり覚えている。

ただ、私は本来が「貿易マン」であるのに対し、岩田さんは「農園マン」を買ってきていたので、南方にいた間は1回位お目にかかった程度であった。

戦後も直接仕事の上でお付き合いする機会は、戦前同様になかったが、一方で経団連の会議

## 岩田喜雄理事長を偲ぶ

や経済界の講演会などの席で、ご一緒になることが多かった。経団連では、国際経済の立場に立って物を見る財界人が多い。そんな人達の中に混じって、農業一筋できた岩田さんが異質な人物として見られなかったのは、やはり大正の初めから南方で農園事業に取り組んできた長年の積み上げがあったからであろう。特に私の場合は、スタートが同業であるというよしみも加わって、農業一筋の岩田さんに非常な尊敬をはらって接してきたのは事実である。

私からみると、大正の初めにすでに「南方は農業である」ということに着眼し、最初から南方における農業の優位性、重要性を念頭において栽培事業に取り組まれた岩田さんの慧眼は大変なものであると思う。

戦前、志を抱いて図南した人々の数は多い。しかし、それらの人々は太平洋戦争の敗戦という歴史の屈折もあって、散りじりばらばらになってしまった。岩田さんもご多分にれず戦争がもたらした不幸により、事業の経営基盤や個人の財産を失うという災難をこうむられたそうだが、戦後は単なる「南方通」に終わらず、東南アジアへの農業協力事業に戦前にも劣らぬバイタリティーをもって努力された。

思い返せば岩田さんは、本年4月に逝去されるまでの70有余年、終始一貫して南方農業に情熱を燃やし続けられたわけだが、このような生き方は、誰にでも真似のできるものではない。まさに岩田さんの真骨頂である。

本誌の編集部に請われて、岩田さんの人となり、想い出等について記してみたが、本稿の締めくくりとして、今日における東南アジア諸国の農業問題について簡単に私なりの整理をさせていただきます。

私自身は、戦前は、ゴムだけでなく東南アジア地域における農産品をほぼ全般にわたって扱い、戦後もまたインドネシアのランボン農業開発事業などを通じて現地の農業と関わってきた。その収量性は日本に比べると、3分の1から5分の1程度である。水利を図るとともに農法を改良し、地力の維持につとめれば収量はもう少し上がるのであろうが、それをしないために食糧の不足を招いている。

戦後に独立した東南アジア諸国は、工業化への志向が強まってきたが、これからは恵まれた自然条件を活かした農業生産にも工業化以上に力を入れていかななくてはならなくなるであろう。

あれだけ膨大な人口を抱えている国々が、農業に基本を置かず、工業化のためにいくら資本を投じてみても、それだけで繁栄を実現するのは至難の業であるからだ。農業をおろそかにして栄えた国というのはまずもってない。中にはカルタゴのように食糧を輸入していながら栄えた国もあるが、そういう国でも結局は滅亡している。食糧の不足をしている国の繁栄は長く続かない。戦後の東南アジアは他の発展途上地域と比べると、きわだって発展している。しかし、一方では人口も急速に増えているのであるから、それに見合う食糧増産の方策を講じる必要に迫られている。発展を長く維持し、確固たるものにしていくためには、農業の重要性を現地の人々自らが十分に認識する以外にない。同時にわれわれ日本人にも、従来にまさる農業への協力が要請されてこよう。農業をもってわが国と東南アジア諸国との関係をより緊密にしていこうとするとき、戦前・戦後を通じて南方農業の発展に全身全霊を注がれた岩田さんの努力は、後に生きる者の指針ともなり、その足跡は大いに評価されるのである。

# 岩田喜雄氏その生い立ちの記

— 1889～1916年 —

(社) 海外農業開発協会常務理事 小 林 一 彦

岩田喜雄氏がアジアの熱帯農業にかかわってきた歴史は70年に及ぶ。大正初年に農園経営を夢みてマレー半島へ渡って以来、第一次大戦から第二次大戦へ、そしてわが国の敗戦の日を迎えるまで、激動する時代の流れのなかで、氏はつねに不撓不屈の信念をもって南方各地にいくつもの農園事業を展開した。そして戦後、発展途上諸国への農業開発協力に一貫して参画してきたことは周知のところである。本稿では、氏の比較的知られていないプロフィール、すなわち、その生い立ちから、初めて南方の開拓に挑戦した時期までを記す。

## どここの「馬の骨」？

「僕は南方の馬の骨だ」と、岩田喜雄氏は、生前、好んで口にしていたが、岩田家は古い由緒ある家柄のようである。祖父は、幕末維新のころ、いまの千葉県流山市の、当時は加村とよばれたあたりの名主、のちに副戸長を勤めた。その長子の父(喜助)は、慶応4年に流山に逃れてきた近藤勇と、官軍が彼を捕縛に来るまで毎日毎夜、面談したりしている。

父は千葉師範学校を出て小学校教師となり、長野県に赴任して3年余りたった明治22年11月23日、更級郡稻里村の古戦場と伝えられる中氷鉦<sup>なかつがの</sup>陣場<sup>じんば</sup>というところで二男喜雄が生れた。長男は生後数か月で死亡している。

母(ハツ)は、やはり流山の野々下村の副戸長をしていた戸部嘉兵衛の養女で、明治9年に岩田喜助に嫁いでいる。

## 人のよい父、心の強い母

父は、信濃の村々の小学校を訓導兼校長として転々とし、その間に農桑のことを学び、信濃農談会の会長に推されて、『信濃農談会報』を発行したり、また『信濃実業新聞』の

発起に参加したりしている。

そのため、父にはしょっちゅう来客があった。それも、酒をのみながら話し込み、興に乗っては「日清談判、破裂してえ……」などと歌いだし、ときには母もいっしょに歌わされ、あげくのはてには泊っていく客が多かった。当時の小学校校長の月給は20円かせいぜい30円で、月給袋はたちまち空になった。

けれども母は、いやな顔を見せたことがない。愚痴をこぼしたこともない。小柄な身体で田畑を耕し、桑の葉を摘み、黙々と働いていた。そして、じつによく父に尽くしていた。

日清戦争の終わった翌年に岩田氏は塩尻尋常小学校に入学している。冬は雪中1里半の通学で、少年には難渋を極めたが、母は「学問をしていくのに、雪に負けてどうする」と少年を励まして、彼が学校を休むのを許さなかった。

「僕には母の気性がうつったと思うね。しかし、おやじがただ真面目な校長で、ああいふ酒のみづきあいを見ていなかったら、僕は、南方に行っても、ただ真面目に働いてただけで、立派な人たちとつきあうようなことは

しなかったかもしれないね」と岩田氏は述懐していた。父の人づきあいのよさと誠実、母の心の強さと勤勉は、いずれも岩田氏の人柄のうちに熟していったのである。

### 家を継ぐ立場

日露戦争の始まった年に岩田氏は、初めて両親のもとを離れて、群馬県太田中学校に入学し、翌年、東京・本郷の京華尋常中学校に転校している。

京華尋常中学校長の磯江潤先生が修身の時間に話してくれたセシル・ローズの成功譚は少年たちの心を揺さぶった。セシル・ローズとは、明治3年に南アフリカに行ってダイヤモンドを採掘して、巨財をなし、ケープ植民地の首相となり、南アフリカ連邦をつくる政策を推進して、「イギリス帝国の父」ともてはやされた人物で、明治時代に図南を志した者の多くにとって憧れの存在といつてよかった。

明治42年3月、岩田氏が京華尋常中学校を卒業したとき、父は信濃における22年間の教職を辞めて、すでに一家を父祖の地流山に連れ帰っていた。そして、そろそろ隠退して句作三昧の暮しをしたいと望んでいた。母は宿疾が募っていた。三歳下の中学生の耕作には養子縁組の話があり、その下の2人の弟たちはまだ小学生であった。岩田氏は、自分が家督を継いで、父母を孝養し、家運を回復しなければならぬ立場にあるのを承知しなければならなかった。

当時、またまた千葉県立園芸専門学校が松戸に開校されようとしていた。これが、のちに千葉大学となり、国立大学唯一の園芸学部として発展する。この学校なら、家から歩いても通学できると、父のたつての勧めもあり、岩田氏は、同年、同校に本科第一期生として入学した。松の大樹に桜吹雪が美しかった。

### 海外雄飛の夢

松戸の園芸専門学校は岩田氏の性に合っ

ていたようである。「彼は……教員、助手、学生間の評判がすばらしかった。……よく学び、よく遊び、かつ農場実習でよく働いた」と、当時の学友は語っている。当時は肥料といえは下肥だけで、肥桶を天秤棒の前後に二つや三つずつぶら下げて平気で担ぐ体力が岩田氏にはあった。また、日曜などの休日には母に百姓の仕方を教わる熱意があった。

東京・神宮外苑の絵画館前に見事な銀杏の並木通りがある。あれは、園芸専門学校の林脩己先生が設計して、岩田氏たち学生とともに何日も宿泊して植え付けたものである。また、東京・高輪台の東端に岩崎家別邸跡の開東閣があるが、そのイギリス・エリザベス朝様式洋館にあつらえられたイタリア式庭園も林先生が洋行して構想し、岩田氏たち学生を指導して造ったものである。そのモダンな造型の眺めは、岩田氏の夢を海外へ誘い、しかし自分が家を継いで老父母を孝養すべき立場にあることを氏に思い起こさせた。

園芸専門学校長の鏡保之助先生は、アメリカ・カリフォルニア州で百合の温室栽培で華々しい成功をおさめている日系人の農場経営者に園芸専門学校の優等卒業生2名を斡旋する約束をしていて、その1名に岩田氏を選びたいと、ある日、学校を訪問した岩田氏の父に語った。それを聞いて父は、しかし、とくにどうともいわなかった。それゆえ岩田氏は、渡米して自分の大きな農場をつくらうという夢をふくらませていったのである。

ところが卒業の年、明治45年になって、園芸専門学校が県立から官立になることになり、ついでに優等生の成績は文部省の任命する新教授によって再評定されることになった、というのである。真相はもうひとつ不明であるが、岩田氏はすでに渡航免書まで用意していたのに、いずれにせよ渡米の夢をやぶられたのである。

卒業した翌月、岩田氏は新潟県三島郡立富岡農業学校へ嘱託教師として赴任していった。

### 卒業論文『栗栽培論』

岩田氏の卒業論文は千葉県立園芸専門学校第一期生の卒論として有名で、いまでも千葉大学に大切に保管されている。「明治四拾五年二月拾五日」付の『栗栽培論』と題された和綴二分冊で、総 850 頁に及ぶ丹念な毛筆書きの力作である。見事な彩色描写の品種図 20 葉は、岩田氏の従兄弟の美術学校学生永田深水氏に描いてもらったものである。

目次の章名だけ抄録すると、「第壹章 形態、第貳章 栗ノ学名ニ就テ、第參章 沿革、第四章 気候地勢土質、第五章 品種論、第六章 繁殖、第七章 開園、第八章 栽培、第九章 剪定及整枝、第十章 肥料、第十一章 除草及中耕、第十二章 間作、第十三章 選別荷造及包装並販路、第十四章 採收時期及方法、第十五章 栗ノ成分、第十六章 病虫害、第十七章 貯蔵法、第十八章 加工論、第十九章 収支計算、第二十章 朝鮮ニ於ケル栗樹栽培業、第二十一章 結論」。そして巻末に、「参考書目録」とともに「衣斐鉄次郎氏略伝」を付している。

「凡例」には、「本論ノ編次ニ當リテ参考書トシテ栗樹ニ関シタル著書更ラニナキヲ以テ、歐米諸家ノ著ニ據ルモノ多ク、之レガ本邦栗樹栽培上ニ於ケル適否ハ未遽ニ判ズベカラズ。然ルヲ以テ本邦栗樹栽培上ノ意見トシテハ殆ンド自己ノ案ニナル……切ニ識者ノ批正ヲ待ツノミ」と述べている。

わが国の栗のまず品種同定について本格的な調査・研究が開始されたのは大正 2 年、京都府農事試験場に集まった専門家たちの会議からである。わが国の栗の研究において岩田氏の卒論がどれほどに先駆的な意味をもっているか、その専門的評価が望まれる。

この卒論は、その大半が足で書かれたものである。岩田氏は、夏休みなどを利用して、西は京都府船井・桑田郡、大阪府下摂津豊能・下氷上郡（丹波）、岐阜県揖斐郡などの、

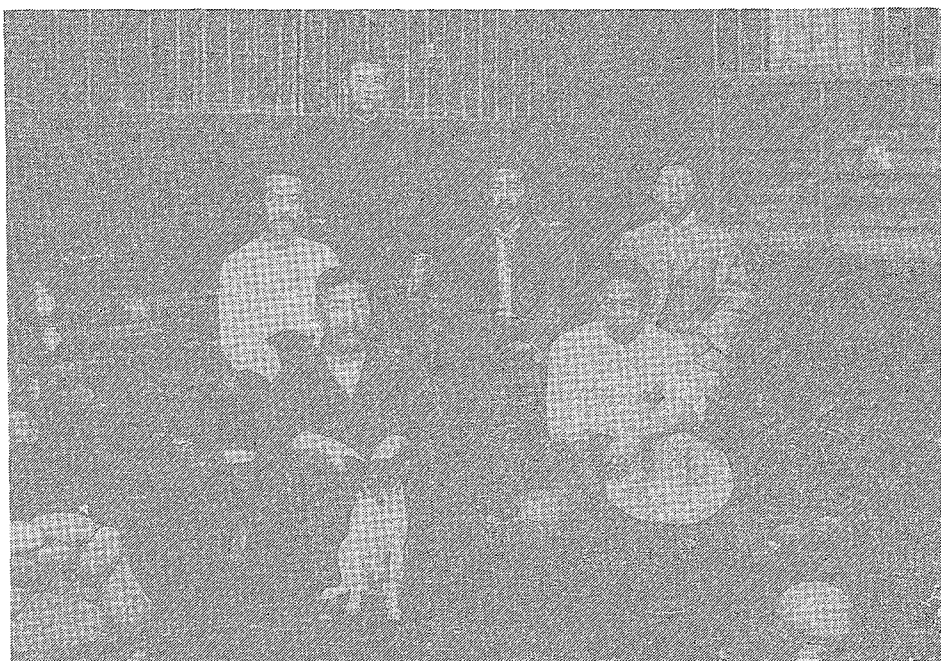
東は山梨県下東山梨郡、長野県小県・上高井郡などの栗栽培地を草鞋<sup>わらじ</sup>ばきで踏査している。そして、その踏査の際にお世話になった衣斐鉄次郎氏の略伝を巻末に付しているところがまたいかにも岩田氏らしい。

のちに岩田氏は、スマトラ、台湾、カロリン群島、ニューブリテン島などでのカカオ栽培の実験を踏まえて『カカオ』（「南方農林叢書」河出書房・昭和 19 年）を著わしている。これはカカオ（ココア）栽培に関する初の邦文献として記念さるべき出版であるが、農学者としての岩田氏の迫力ある特長はすでにその卒論にうかがえるのである。

ついでながら、岩田氏は丹波の笹山へ栗栽培の調査に出かける際に父から旅費として 25 円という大金をもらった。学校の寄宿代が 1 か月 25 銭の時代である。父は相変わず酒をのみたい放題にのんでいたで、母は身内に頭を下げて金策したこともあったようで、それを父に渡し、父はそれを息子にくれていたのである。岩田氏自身も、「酒はおやじの仕込みだ」といって、学生時代には酒力の試し合いをやって、2 合入り徳利を 10 本くらいのもので酔いつぶれることはなかったという。しかし岩田氏は、学校を卒業すると同時に酒も卒業することにした。

### 図南の決意

一枚の古い写真（右頁）に 6 人の男と犬が一匹映っている。校舎らしい木造の建物を背にして着物や学生服や背広を着ているなかで一人だけ地下足袋・脚絆姿で麦藁帽を手になっている若者が石の上に腰を下ろしている。新潟県のいまの長岡市である三島郡深才村の郡立富岡農業学校の教諭となつたころの岩田氏である。「農業学校の教師たる者の本分は、教壇にあらず、実践である」という父のことばが、当時の岩田氏の念頭にあった。岩田氏は、教壇に立つことにもまして、生徒たちを率つてて学校園造りをしたり、神社やお寺の



大正元年7月、富岡農業学校にて。前列右が岩田氏。

清掃をしたり、あるいは県道や橋の修理などに地元の青年会の若者たちを指図したりして、その指揮ぶりが界隈の村々の評判になった。

そのころ、松戸の園芸専門学校の林先生から手紙があった。次のような要旨である。

「南方におけるゴム栽培事業は、近い将来、わが国にとってきわめて重要な産業になると思われる。こうした時代の流れを判断した大倉組が、マレー半島の南洋ゴム株式会社パンチョール農園で働く勇気のある青年を、費用は一切負担するので、紹介してもらいたいと依頼してきた。私は貴君を推薦したいと思うが、どうであろうか……」

林先生に紹介を依頼したのは皆川広量氏という、もと大倉組商会天津支店長をしていた人である。林先生からの手紙を読んで岩田氏は、はげしく心を揺さぶられた。

海外へ雄飛して農場をひらきたいと夢みたが、夢はやぶれた。そしていまでは、この村の学校で農業教育を実践していくつもりで、南方へ行くなどとは、およそ考えもしなかつ

たことである。しかし岩田氏は、まるでそれまで自分でも夢みているとは気づかなかった。凶南の夢がにわかに現実化しようとしていることに、いま気づいたかのように思われた。ちょうど時代が明治から大正へと変わるころのことである。

岩田氏は、夏休みに流山に帰って、兄弟会を開き、もし自分がしばらくの間、「異郷ノ地」に働きに行く場合、自分に代って父母の孝養をしてくれと、姉や弟たちに頼んでいる。しかしまだ、父母に南方行の話をはっきりと打ち明けるのは、ためらわれた。父は、酒ののんではよく海外問題の講釈をするくらいであるから、なんとか話はわかってもらえるだろう。しかし母は、何というだろう？

岩田氏は、いったん富岡農業学校にもどって、また流山の家に戻り、ある晩、例によって父が酒をのみながら海外問題について講釈をはじめたとき、頃合いはよしと、凶南の決意を打ち明けた。

「そんな熱帯病が蔓延し、猛獣がうようよし

ているところへ行くなんて、死にに行くようなものだ。なににも好きこのんでそんなところへ出かけて行かなくなつて、おまえの活躍できるところは日本にいくらでもあるではないか」と父は反対した。「だから僕は、死ぬ覚悟で、一生を賭して……」と岩田氏は父の説得につとめたが、父は頑張っている。

すると、それまで黙っていた母が、「お父さん、喜雄は一生を賭してやる、といっているのです。それならば、行かせてやってもいいでしょう。喜雄、大成せずんば、死んでも帰ってはなりません。途中で帰国するなどのことは許しません」という。「いや、お母さん、喜雄は跡取なんだから、成功するまで帰ってくるな、なんて、いうものではないよ」と、なんとも情無いといった顔で父はおも泣いていたが、「結局、母の一言で僕の南方行は決まった」と、岩田氏はよく述懐していた。

## 別れ

当時の一般日本人にとって南方は恐ろしい野蛮の地、瘴癘しょうれいの地ではしかなかった。欧米へいわゆる洋行することは多くの日本人の憧れであり、また中国大陸へ雄飛したいと夢みた青少年もけっして少なくなかったのに対し、南方はまともな者の行くところではないとさえいわれていた。

「岩田とも、これで終りだな。向うに行けば、どうせマラリアで死ぬか、虎に食われるかだ。最後の別れに、みんなで酒をのもう」といって松戸の同窓生たちが、岩田氏のために送別会をしてくれた。

近所の人たちも多数、岩田家に集まって、祖道の宴を張ってくれた。そのころ流山の村には葬式のときなどに寺で太鼓をたたきながら歌をうたう組があって、この組の者たちが歌をうたってくれた。女たちは台所で飯を炊いたり煮物を煮たりしてくれた。皆川氏も、銭別<sup>せんべつ</sup>に5円也と『南洋産業及高源』という本を持って来てくれた。「この人から、僕は、

いわば人生の道をひらく鍵を手渡された」と、岩田氏は生涯、皆川氏に感謝していた。

大正2年1月、出発の朝は雪がしきりに降っていた。父は、出征する息子を見送るような思いで酒に酔って、歌ばかりうたっていた。母は、「生きて帰らなくてもいいから……」といっ、岩田氏を励ました。

横浜港の棧橋まで、知人や友人が見送りに来てくれた。夜の冷たい浜風のなかで岩田氏と知人・友人たちは、たがいに手を振りあって別れた。

## 初めてのシンガポール

大正2年1月21日、岩田氏を乗せた常陸丸は横浜を出港してから17日後にシンガポールに入港した。麦藁帽をかぶり白い夏服姿で両手にトランクをぶら下げている岩田氏を、南洋ゴム株式会社パンチョール農園（以下、「南洋園」とよぶ）の2人の日本人従業員が出迎えてくれた。

シンガポールに日本人の進出が目立つようになったのは明治中期からであるが、明治27年にシンガポールにやって来た中野光三医師は次のように語っている。

「（そのころのシンガポールの）邦人の姿は実に寂々々たるもので、娘子軍とこれに関係ある男子は相当にいたが、表面の舞台に立つ資格のある者は、三井物産支店……（の3）氏と前大和商会主……と吾輩の5人位のものであった。……土人や支那人に対して信用や勢力のないこと実に驚くばかりであった。況んや欧州人に於いておやだ」

「娘子軍」とは日本人娼婦の群れの意味で、彼女らのいる娼楼は、明治から大正にかけてシンガポールのみならず東南アジアの全域において繁昌し、彼女らに日本人の商業活動、たとえば呉服屋、雑貨屋、旅館、医者、写真屋、洗濯屋などが寄生していた。

日清・日露戦争に勝って、一躍、国際的地位を高めたと自負する日本政府は、これまで

のように娘軍を放置しておいては、せっかくの国家威信にかかわると、イギリス・シンガポール政庁にも廃娼政策を働きかけた。岩田氏が初めてシンガポールに上陸した大正2年には藤井実領事が着任して、熱心にシンガポールにおける廃娼運動に取り組む。

シンガポールは、日本娘軍発展の時代からゴム・ブームの時代を迎えつつあった。

#### ジョホール河畔の日本人ゴム園

岩田氏は、上陸した翌日、シンガポール港から20トン足らずの蒸気船に乗って、パンチョールへ向かった。パンチョールは、ジョホール川の河口と上流のコタティンギとのほぼ中間に位置している。

ジョホール川をさかのぼって行く蒸気船の上甲板に立っている岩田氏の身なりは、下甲板に同乗しているマレー人や中国人たちの目をひいた。白い単衣に袴を着け、黒の革靴をはいている。これこそジャングル開拓に赴くにふさわしいでたちであると若い岩田氏は気負っていたのであるが、とくに袴は、マレー人やジャワ人の腰巻と比較されてか、しきりに珍しがられるばかりで、べつに威厳あるスタイルとも見られなかったようである。

岩田氏は、初めて眼前に見るジャングルの迫力に圧倒された。挑戦だ！ 心中でそう叫んだ。しかしジョホール河畔のあちらこちらに見えるゴム林のゴム樹はいずれもまだヒョロヒョロしたものばかりであった。このころこのあたりのゴム林のほとんどは、植栽してまだ2～3年しかたっていない。すなわち、それが、マレー半島のもっぱらこのジョホール河畔に集中していた日本人経営のゴム園の当時の段階を示していた。

ジョホール河畔で日本人が一斉にゴム園経営を始めた明治44年には、マレー半島西部部はほとんどがイギリス人によって、筆者の推算ではマレー半島の全面積の $\frac{1}{100}$ 以上がすでにゴム園化されていて、彼らは大正初年に

は暴騰するゴム価格のなかで巨大な規模でラテックスの採液がおこなわれていたのである。

しかし、岩田氏が出かけて行った当時のジョホール河畔の日本人ゴム園は、なお依然としてジャングル開墾・植付の時代、植栽地の拡大期であったといつてよい。

#### 老化演技

熱帯雨林の開墾をするには、気候条件を十分に計算に入れた周到な準備を要する。もし開墾の途中で雨季に入ってしまうと、溢れるばかりの光と湿度に助けられて、切株などからたちまち無数の新芽が生え、そしてたちまち雑木の密生する大藪と化してしまう。したがって、乾季のうちに伐木、焼払、除草を終わらせ、雨季に入ってからには苗木を移植できるようにしておかなければならない。

仕事の手順や仕方などについては岩田氏は前任者たちに教えてもらった。しかしたいへいは、学校出の若さうに何ができるかといったふうで、冷淡だったようである。

ただ、ジャングルの開墾などは、あらかじめの知識がなくても、実際にはタウケイ（頭家・東家）とよばれる中国人<sup>クレーがしら</sup>の苦力頭が何百人もの中国人苦力を指揮して作業をすすめてくれた。日本人従業員はその監督をしていればよいということであった。

苗木の根切り、運搬、そして植付と、各班に分かれた苦力たちが分業する。監督は、それらの作業に直接手を下す必要はなかったが、いずれの作業にも手抜きがないように十分注意していなければならない。その後の苗木の成育にたちまち影響するからである。しかし苦力たちのなかには監督の顔をうかがって手を抜く者もいるので、監督の采配ぶりもまたすこぶる重要であった。

しかし、そもそものようにしたら監督らしく見えるのか。若い岩田氏は、これは自分にとって容易ならざる問題だと思われてきた。氏はこのころ25～26歳である。

「トン・ブサール(大旦那)」と苦力たちは監督をよんでいたが、彼らの目には、岩田氏は、どう見ても若そうとしてしか映らなかった。鼻下にひげを生やしても、それで監督の顔になるわけでもなかった。「インドや中国から流れ込んできた、一癖も二癖もある連中に、年が若いというだけで馬鹿にされては、仕事にならんぞ。君の立場は、ゴム園づくりの楽しみだけではないのだ」と、内地(日本)からも訓令がとんできた。

僕は馬鹿にされてもかまわない。けれども、それで彼らが僕の命令に従わないことになれば、たちまち仕事に支障を来す。何としてでも威厳を保たねばならぬ……。そう考えて岩田氏は、せつせと年より老けて見られるように工夫したが、そういう即席の老化演技は、根が朴訥な岩田氏にはいかにも苦痛であった。

#### 苦闘の日々

雨季はマラリア発生の季節でもある。雨に濡れたあと、強烈な太陽で急速に乾いて体温が失われるとき、ことに疲労しているときには、たちまちマラリア症状が現われた。当時、イギリス当局は、降雨のときに苦力を働かせることを禁じ、労働監査官が各農園の労働管理の実情をチェックすることにしてしたが、この労働規則は実際には有名無実であった。農園側としては、労賃の支払いが一日いくらと決まっていたので、しょっちゅうやって来るスコールのたびにいちいち苦力を休ませていたのでは、作業が進まないのに労賃だけは支払うという二重の損失になるので、日本人経営の農園では、降雨のなかでも苦力に作業の続行を強要することが多かった。

南洋園もそれは例外でなかったが、ただ岩田氏が特異であったのは、スコールが来ても、監督の氏自身が平気で雨に濡れていたことである。苦力頭が、たまらなくなて、こんなに降っているのだから作業中止にしてもらいたいといっても、氏は、雨に濡れたからとい

って、ただちにマラリアになると恐れることはないのだという信念をもっていたし、晴天のときにも怠けようとする苦力たちが雨にかこつけてずるけるのだろうと思っていたから、その要求をはねつけた。

要求をはねつけられた苦力たちは抗議し、なかには鋤を振りまわす者もいる。その苦力をひっぱたく。そしてたちまち取っ組み合いとなる。すると、農園から給料をもらっている立場の苦力頭(苦力たちの労賃はその給料から支払われる)が仲裁に入るのであった。

苦力たちを日本人従業員たちとたがいに言葉も生活・習慣も異なる者どうしが三百六十五日いっしょにいれば、些細なことでトラブルが続発した。相手は何百人、こちらはせいぜい十数人である。苦力たちと農園の従業員の全部がぶつかりあうことはなかったが、人数差はつねに脅威であった。しかし喧嘩は、始めてしまった以上、勝たねばならなかった。万一、負けるようなことにでもなれば、苦力たちに甘く見られて、もはや監督としての役目は果たせない。だから、命知らずのやりあいさえした。

苦力を何百人何千人も使っていくには、腕っぷしも強くなくてはならぬ。南洋園では社員たちは、毎日、夕食後に何時間も相撲や棒剣術などの稽古に励んだ。この猛稽古はまた、マラリアに罹らないための体力づくりにもなると岩田氏は考えた。しかしその効果は、氏が期待したように一石二鳥とはならなかった。稽古に励んでいた日本人従業員たちも相変わらずマラリアのために死んでいったのである。

とくに苦力たちのマラリアによる死亡率は高かった。大正2年のマレー半島における総死亡者数の半数がマラリアを主とする熱帯病によると報告されているが、マラリアの流行はとくに新開地、すなわち苦力たちが働いていたところで著しかったのである。

南洋園でも、苦力たちが、毎日、5人、6人と死んでいった。熱発作を起こして、身体



パンチョールの植付3年後のゴム樹とタウケイたち。

を水で冷そうと川辺に行って、そこで力尽きて、川に流されていった者もいた。

苦力たちの多くは、この南の地にやって来なければならなかったその境遇を象徴するかの様に、戸籍も、いや名前さえもわからなかったもので、斃れると、どこか誰とも確認されることもなく、斃れたところが彼の墓となった。岩田氏は、毎日、その死骸をゴム樹の下に埋葬した。日本人従業員の亡骸は火葬にした。

スコールにずぶ濡れになって働いても、身体を強健に鍛えれば、マラリアなど克服できるのだ、という岩田氏の自信も、ゆらいでしまった。そしてまた、岩田氏は、いつの間にか喜怒哀楽の感覚が麻痺してしまっているような自分にふと気づいて、ぞっとしたことも一再ではなかった。

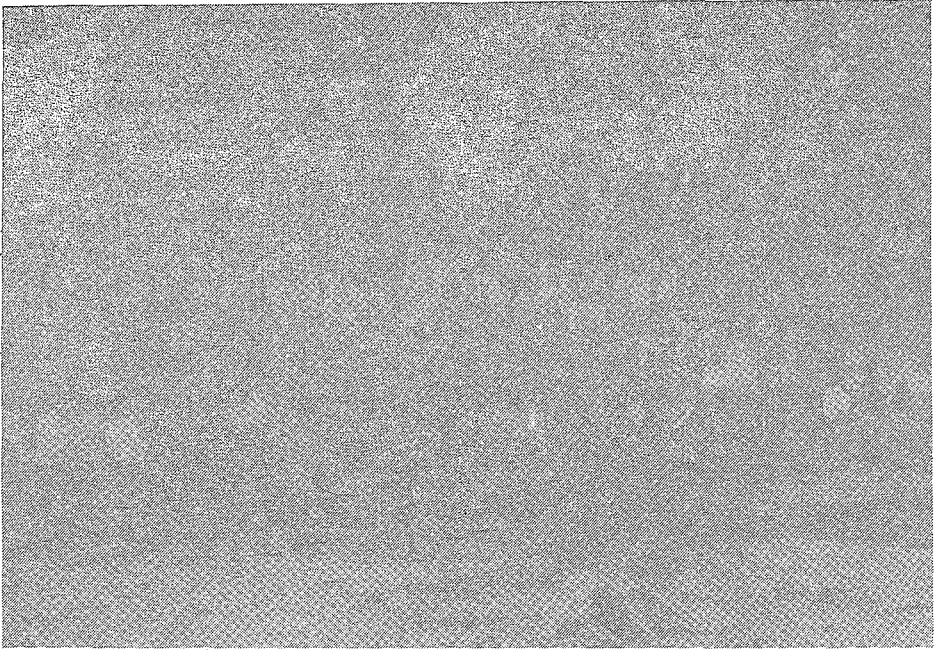
ジョホール川をさかのぼる蒸気船の上甲板からマレー半島のジャングルを初めて望んで、さあ挑戦だと決意を新たにしていたあの時のことを、岩田氏はあらためて思い起こした。第一

次世界大戦が始まったころのことである。

#### 抗 議

岩田氏がまずジャングル開墾に従事してから3年たった大正5年、南洋園のゴム林では樹々がもうすっかり逞しい容姿を見せていた。第1期植付のゴム樹が5年木になって、他のゴム園にさきがけて採液を始めた。世界のゴム需給は依然として上昇しつづけていて、内地本社の重役たちは現地の状況がやたらと気になり、その算盤からの現地への指示にも日に日にきびしさが加わってきた。現地従業員たちのあいだには不満がくすぶってきた。

ある日、やにわに現地従業員の待遇に関する変更が通達された。南洋ゴム株式会社はイギリスやオランダの農場経営にならって利益の10%を現地従業員に配当することを会社定款に明記していたが、このたび長野善五郎新社長の役員会において現地従業員への利益配当はそのつど役員会に諮って決めることに決定した、というのである。現地従業員たち



大正5年ころの南洋圈。左から2人目が岩田氏。ゴム樹のタッピングがおこなわれはじめた。

は、これを強く反発した。

「ゴム価格がうなぎ登りになっているいまになって、現地組に10%の配当では現地組の儲けすぎだなどとい出すとは、何事か。だいたい10%だって、命の報酬としては微々たるものだ」という仲間たちの怒りを、岩田氏ももっともだと思った。

南洋ゴムがなったというイギリスやオランダの農場従業員への利益配当に関する規定は、イギリスやオランダの植民地経営三百年のきびしい経験に基づく認識の一つの表現であつたろう。しかし、そうした重みが、目前の算盤しか持ったことのない者の手には感じとられなかったのであろう。内地本社が現地従業員に関する利益配当規定を会社定款からあっさりはずしてしまったことに、やり場のない怒りを覚えずにはいられない日常の実感が、現地従業員のだれにもそれぞれにあった。単なる現地従業員の待遇変更問題ならば、その責任者は、むしろ現地社長ともいふべき後藤吉武支配人のはずである。岩田氏をはじめ

従業員たちは内地本社に向かって憤慨していた。

#### 母の死

そのころ、岩田氏は、朝まだきに母の夢を見た。「喜雄、元気かえ」と母。「ああ、お母さん……、どうしてそんな白装束なの……」

朝になって氏は、仲間にその夢の話をした。そして、すぐに手紙を書いた。この手紙はそれから約1か月後に流山に届いた。

「(氏が夢を見た)其折、母持病を発して苦痛の折柄、喜雄に逢ひたいが逢へぬといへり」と父は手記を書いている。それから間もなくして母は亡くなった。

「母死す」の電報がとどいた。そのとき岩田氏は、しかし、すぐに帰国できる状況にはいなかった。

内地から長野社長が現地視察に来るとの知らせがあった。従業員たちは、社長に抗議することに決めた。社長は、シンガポールに到着すると、パンチョールに直行してきたが、

従業員たちは宿舍に閉じこもったまま社長を出迎えることもしなかった。そして岩田氏が社長に面談した。生一本な氏は、自分が鹹首になるのを覚悟で、定款の現地従業員待遇変更に関する役員会決定の撤回を社長に迫った。

長野社長は、現地視察どころではなく、園内の宿舍に二泊したばかりでシンガポールにもどって行った。

岩田氏は、これで自分は鹹首だろうと思った。しかしまた、内地本社に行ってもう一度掛け合ってこようとも思った。それに、母を弔いたかった……。岩田氏は帰国することにした。

大正5年7月、船がシンガポール港を離れるとき、氏は、3年半まえ、初めてシンガポールに上陸した日のことが思い出された。挫折感、そして憔悴感にとらわれて、氏は船中で眠りこけた。夢にみるのは、「生きて帰らなくてもいいから……」と励ましてくれた母の面影ばかりであった。

岩田氏は、日本に着くと、その足で東京・京橋の南洋ゴム本社へ向かった。

長野社長はまだ視察から帰っていないとのことである。岩田氏は、二人の重役会遇到現地状況を説明し、現地従業員の待遇変更の件を再考してもらいたいといった。二人の重役はカンカンに怒って、氏が辞表を提出すると、氏を即刻解職とした。

「セシル・ローズか……。とんだセシル・ローズだ…」

岩田氏はそうつぶやいて、流山の実家に帰った。父は、氏が休暇で帰省してくれたかと、うれしく思っていたらしい。

岩田氏は流山の実家に帰った。父は、氏が休暇で帰省してくれたかと、うれしく思っていたらしい。

その数日後、突然に南洋ゴムの例の二人の重役が彼を流山に訪ねて来た。長野社長は、あれから他のゴム園を視察してまわっていたので、帰国が岩田氏よりあとになったのであ

るが、その留守中に二人の重役が岩田氏の辞表を受理したことを知ると、「あのような男がいなくては、この事業はできぬ」といって、岩田氏を復職させるよう二人に命じ、また現地従業員の待遇問題についても再考すると二人の口から伝言させたのである。

7月28日、「(喜雄は母の)本葬儀を執行し、喪に服すること五十余日、九月、喪章を帯して帰場す」と父の手記にはある。

### 蜚勇の再出発

大正7年、28歳の岩田氏は南洋拓殖工業株式会社によるカロリン群島の資源調査団の団長となって同群島に出かけていった。しかし、9年には南洋園の同僚渡辺修の妹婉子と結婚して、ふたたびジョホールへ、日東ゴム株式会社の農園支配人としてレンガムへ赴いている。

バンチョールの南洋園は、岩田氏がバンチョールを去ったところから他のゴム園とは顕著な差異を現わしてきた。他のゴム園での採液がたとえば1トンのところを南洋園では2.5トンとなり、このことが、長野社長との一件とともに、現地・内地で岩田氏の評判を高めた。当時やはりジョホール河畔でゴム園を営んでいた、ある岩田氏の先輩は、氏のことを評して、次のようにいったという。

「蜚勇だけが唯一の取得の男だ。この蜚勇がなければ、無から有は生じなかった。バンチョール農園の成功は、金ではなく、彼の蜚勇のなせる業である」

しかし、それがどのような「蜚勇」であったか。それは、それまでの、そしてその後の岩田氏の人生の軌跡そのものが語ってくれよう。



# 戦後の経済協力と岩田喜雄氏

—アジア協会～アジア会館～OTCA—

(社) 海外農業開発協会専務理事 大 戸 元 長

## はじめに

戦後の岩田氏の活動は、もっぱら開発途上国に対する経済力への参画であり、それは、氏が30余年にわたった心血を注いできた「南方」への愛着からであった。その活動は多方面にわたったが、氏が、直接に、かつ、最も密接に関係されたのは、(財)アジア協会、(財)アジア会館、および、氏の本来の分野である農業部門における(財)海外農業開発財団と、それを引継いだ(社)海外農業開発協会であった。本稿では、これら4団体との関わりを、そのときどきのわが国経済協力の動向との関連で記述する。これら4団体のほかにも、氏の発意あるいは支援で作られたのは、氏が会長をしておられた(株)日本シンガポール協会、(株)日本ミクロネシア協会、(社)日本アフガニスタン協会などがあるが、本稿では割愛する。なお、海外農業開発財団／協会での活動は筆者が直接に関わったものであるが、それ以外の部分は、生前にご本人から聞いた話や、諸資料および関係者からの聴き取りによるものである。

## 1. 戦後の苦悩

終戦直後の日本の混乱期は、岩田氏にとって苦難の時期であった。南方の事業地を失った昭和ゴムの社長として、現地農園からの引揚者を含む数百人社員の生活が彼の肩にかかっていた。国内にあった千住、尾久のゴム製造工場のほか、戦争中、昭和ゴムが海軍の仕事をしていた茅ヶ崎郊外の海軍工廠跡地に

米軍からの引継ぎを受け開設した相模原事業所では、本業のゴム製品製造のほか、窯業(タイル、砥石)、農薬(クロールピクリン、酒石酸)などの兼業も行なった。

しかし、戦前・戦中を通じて30余年を熱帯農園事業に賭けてきた氏にとっては、国内の加工業は畑違いであっただけに、この間は苦難の時期であった。おそらく、この期間中も南方への復帰の夢を持ち続け、その日を待ちこがれていたに相違ない。

## 2. 経済協力と賠償への参画

1951年の講和条約により、日本の被占領期間が終わり、国際社会へ復帰するとともに、経済協力と賠償という形で南方への進出の動きがでてきた。1951年には、インドのゴアの鉄鉱開発に、民間の延払融資により資機材および役務の提供を行なったのを皮切りに、翌1952年にはチリ向け機関車の延払輸出というように、次々に民間ベースの経済協力が行われるようになった。また、1954年には、コロンボプランへの加入により、政府ベースの技術協力も開始された。

このような経済協力胎動期に、電力業界の重鎮、松永安左衛門氏は、東南アジア諸国の電力開発と、それに結び合わせた灌漑開発が今後のわが国の資機材と技術の市場として大きなポテンシャルを持つことに着目し、1952年、経済協力推進のための調査機関としてアジア経済調査会を私財を投じて設立した。

岩田氏はその農林水産部長に就任したが、これが、氏の戦後の経済協力への参加の第一歩であったといえる。

この調査会のほかに、経済協力に関わる民間団体が次々に生まれ、戦前からあった南方関係の団体で新しい事態に対応して衣替えしたものも含めると、その数は約30にのぼった。

他方、このような民間の動きに伴い、政府としては、経済協力を国としての統一の方針の下に実施せねばならぬということから、外務省アジア局を中心に、経済協力量針の策定が進められ、1953年には、政府の諮問機関として、民間有識者で構成するアジア経済懇談会を設置した。この会は、原安三郎氏を座長とし、錚々たる財界人をメンバーとしていたが、岩田氏もその一員であった。この懇談会の答申をふまえて、政府（吉田内閣）は、対外経済協力基本方針を決定したが、それは「経済協力は、原則として、民間の創意で行

ない、政府はこれに必要な援助を与える」というものであり、これが、その後の民間主導型のわが国の経済協力の基本路線となったわけである。

この頃はまた、経済協力と並行して賠償が、わが国の対外政策の大きな課題であった。1954年には、吉田首相の指示で、賠償問題の諮問機関として賠償審議会が設けられ、石坂泰三、植村甲午郎、小林中、原安三郎氏等10人の民間人が委員に任命されたが、岩田氏もその1員であった。これら民間委員のほとんどは、上記の経済協力の諮問機関としてのアジア経済懇談会のメンバーと重複していた。当時は、賠償と経済協力とは切り離せないものであり、両者を2本の柱として、東南アジア諸国への輸出および資本進出を図ろうというのが官民の基本的な考え方であった。

賠償審議会のメンバーは、総括（小林）、インド（石坂）、フィリピン（永野）などと、各々分担があったが、岩田氏は、もちろ



1954年帰国したインドネシア産業調査団（右端が岩田団長）

ん、その最も得意とするインドネシアを分担した。そこで氏は、経済協力および賠償につき、先方の意向を打診し、政府交渉に先立つ側面工作のために、前記の松永氏のアジア経済調査会の「インドネシア産業調査団」の団長として、1954年2月から約1ヵ月半の日程でインドネシアを訪れた。この訪問を通じ、氏はスカルノ大統領はじめ官民の要人と会談し、かなり詳細かつ具体的な岩田試案を作って、先方および日本政府に提出した。この試案は、結局、表面には出なかったが、試案に含まれていた計画のかなりのものが、その後の対インドネシア賠償および経済協力において取り上げられている。

### 3. アジア協会とアジア会館

前述の1953年の対外経済協力基本方針を決定した際に、その一環として、政府は、当時乱立していた民間の経済協力関係の団体を統合し、これに補助金を交付してその活動を支援することを決定した。これにより、前記のアジア経済調査会のほか、アジア産業協会、南洋協会等の7団体を統合して、1954年、社団法人アジア協会が作られ、名誉会長に松永安左衛門、会長に藤山愛一郎、副会長に岩田氏が選任された。

藤山会長は、当時、日本商工会議所会頭という多忙な本務があったので、協会の運営は岩田副会長が常勤役員としてこれにあたった。

幸か不幸か、氏の本業であった昭和ゴムは、その前年からの売掛金の回収難、滞貨の増加による資金調達難が重なり、親会社の明治製糖はじめ同系の姉妹会社からの資金援助に頼らざるを得なくなったため、経営陣の再編が行われ、親会社から社長および常務を迎え入れた。岩田氏は相談役に退いたため、氏はアジア協会に専従できるようになったわけである。なお、会長は、その後、藤山氏から小林中氏に代わったが、岩田氏は同協会の解散まで副会長を務めた。

さて、アジア協会は1954年度から発足したが、その経営は決して楽なものではなかった。初年度の事業規模（予算ベース）は6,000万円で、うち3,500万円が政府補助金、約2,500万円は会費収入であった。会員は必ずしも協会の事業から利益を受けるといった性質のものではなく、経済協力に対する一種の寄付金としての会費であったから、事務局の会員募集努力や年々の景気、不景気によって会員数、会費収入は変動した。ピーク時（1958～59年）には会員数約480社、会費総額約4,000万円であったが、解散前年度の1961年には360社、会費約2,000万円であった。

このような財政事情もあり、1954年のロンボ計画加入以来急速に増大した政府ベースの技術協力（研修員受入れ、専門家派遣、機材供与）の実施を、政府の委託によって行なうことが協会の主要業務となった。このように、協会が政府の技術協力の代行機関的なものになったことにより、設立当初藤山氏等の財界人が考えたこの協会を「海外向けの経団連」にしようという構想とはかけ離れてしまったといえる。松永氏が、創立後数年で名誉会長を辞任したのも、この不満からであったようだ。

ところで、政府技術協力の逐年の拡大により、受入れ研修員の数が増えて来るに従って、宿泊施設の不足がアジア協会にとって大きな悩みとなってきた。当時は都内にはホテルが少なく、しかも、高価であったから、YMCAなどの公共的宿泊施設を利用していたが、それでは間に合わぬため、1958年に政府研修員のための宿泊施設としてアジア会館が建設された。

アジア会館は政府受入れの研修員のための宿舎だから、本来ならば国費で建てるべきものであったのだが、当時の国の財政事情、ことに、その頃は外務省が本省庁舎の新築に多額の予算を要求していたため、研修員宿舎にまでは手が回らなかったという事情もあって、

その全額を借入金で調達することとなった。総工費（土地代を含む）1億6,000万円の約8割を住宅公団、残りは民間64社から1社50万円づつ借入れて賄ったものである。ちなみに、このとき、住宅公団の資金を、国民の住宅建設以外の研修員施設に当てることができるように、住宅公団法の改正が行なわれている。また、敷地は故山本条太郎氏のものであったが、故人が東南アジア開発に強い関心を持っていたということから、その土地を管理していた原安三郎氏が、これを破格の低価格で提供した。

会館は、それ自身が独立の財団法人であり、会長は小林中氏、副会長は岩田氏で、それぞれアジア協会の会長、副会長との兼務であった。理事には稲垣平太郎、植村甲午郎、原安三郎等の諸氏が名を列ねたが、これらの人々も大部分はアジア協会の理事であった。

岩田氏は副会長兼館長として、会館経営の責任者であったが、その経営には大きなジレンマがあった。つまり、研修員がアジア協会を通じて政府から受け取る生活費はわずかであったから、低廉な室料で宿泊させ、しかも快適な生活ができるようなサービスをするのが会館の使命であるのに対し、会館は独立採算制であるから、その経費をカバーし、かつ借入金を返済して行かねばならぬということである。経営を維持してゆくためには、したがって、政府が研修員に支給する生活費を、会館の経営が成り立つ程度に増額するか、あるいは、研修員の宿泊費は低いまゝとして、それによって生ずる会館の赤字を政府に補填させるのかの方法を取らねばならぬわけである。しかし、岩田館長は、そのいずれをも取らず、部屋数180のうち、70室を研修員用に当て、110室に一般外人客を通常の室代で入れ、また、宴会や会議室を一般客に使わせるという方法を取った。つまり、ホテル営業の収益で研修員の宿泊費、会費を補助するという形である。

この方式には、収益事業に対する税金の問題もあったし、また、研修員を会館に送り込むアジア協会の側からは、もっと多くの研修員を引き受けよという要求が常にあって、協会と会館との利害が対立するということもあった。岩田氏は、協会の副会長としての立場と、会館の館長としての立場から、この調整には苦勞されたことであろう。いずれにせよ、会館はこの方式によって、政府の補助金を全く受けずに運営してゆくことができたのである。

政府の研修員のための施設としては、アジア会館のほか、1960～61年にかけて、名古屋研修会館、三崎水産研修会館、茨城農業研修会館（在内原）が建設された。三崎および内原の施設は宿泊施設だけではなく、教室、実験室、実習船、農場などの施設を持つものであった。これらの研修会館の建設費はほとんど全額が国費で賄われ、アジア協会が所有管理するものとなった。

さて、1960年代初頭からの経済協力の拡大に伴って、政府の国際協力に関する機関も増強され、1960年には特殊法人アジア経済研究所の設立、1961年には海外経済協力基金の設立があった。一方、技術協力の面でも、その量の拡大とともに、対象地域もアジアのほか、中南米、アフリカなどにも広がってきたので、政府は、従来の実施機関であったアジア協会、ラテンアメリカ協会、メコン調査会などの民間機関を統合して、特殊法人海外技術協力事業団（OTCA）を設立することとなった。その準備作業のため、アジア協会は、1961年に副会長を増員して、岩田氏のほか、渋沢信一氏（元外務次官、スペイン大使、タイ大使）を加えた。

OTCAは1962年6月に発足したが、役員構成は、会長小林中氏、理事長は上記の渋沢氏、専務理事、常務理事各1名であった。当時、筆者は農林省から出向してFAO職員として国際機関の多国間農業協力に携わってい

たが、呼び戻されて O T C A の常務理事に就任した。非常勤理事には、中山素平氏、永野重雄氏等、当時「コパチュー（小林中）グループ」と称せられた錚々たる財界人が名を列ね、岩田氏も顧問の 1 人に加わった。

O T C A の発足に伴い、アジア協会の職員の大部分は O T C A 職員となり、また、上記の名古屋、三崎、茨城の研修会館その他の施設は O T C A に移管された。アジア会館は、協会とは別個の財団法人であったから、そのままの形で存続し、O T C A 受入れの研修員に宿泊施設を提供した。しかし、O T C A 研修員の数が逐年増大し、アジア会館の一部分だけでは収容し切れなくなったため、O T C A は直営の宿泊施設（在市ヶ谷、東京国際研修センター）を建設した。それ以後はアジア会館は全館を一般利用客にも提供することができるようになり、岩田氏は終生その館長を務められた。アジア会館が氏の活動の本拠であった。

#### 4. 海外農業開発財団の設立

1960年代の後半は、わが国の経済協力が量的に拡大するとともに、重点地域が東アジア（インド、パキスタン）から東南アジアへ移ったこと、そして協力の分野では、農業部門の重要性が強調されるようになった時期である。1966年に日本政府の主催で東京で開かれた第 1 回東南アジア開発閣僚会議、それに引き続く東南アジア農業開発会議がこれを象徴するものであった。

農業分野での政府協力では、従来の研修員受入れ、専門家の派遣、センター方式協力のほかに、いわゆるプロジェクト方式の技術協力が主軸となって、次々と農業技術協力プロジェクトが開始された。他方、民間協力では、タイの製糖事業（大阪製糖、芝浦製糖）、インドネシアの米増産計画（BIMAS）への日本企業の参加、南スマトラ開発会社の設立（事業実施には至らなかったが、石原グループ

が計画したもの）、ランボンのメイズ開発事業などの動きが出てきた。このように、官民の農業協力の活発化は、岩田氏にとっては、正にわが時到来れりという感じてあったろう。

その頃農業協力を拡大する上での大きな問題は、協力に従事する技術者の調達難であった。鉱工業や土木事業と異なり、自然条件に左右される農業では、温帯農業で育った日本技術者は、そのまま熱帯農業で役立つものではない。また、日本の零細集約農業の技術が、例えばランボンのミツゴロ農場のような何百ヘクタールの大農経営に直接適用できるというわけではない。

その頃、三木武夫氏（当時通産大臣）は、農業協力の重要さを痛感し、官民を通ずる農業協力の促進、実施のための方策を考えており、東畑精一博士らの学者や外務・農林省の関係官や財界人などを集めて、しばしば意見を徴した。当時、筆者は O T C A の理事として農業技術協力の実務に携わっており、上述の技術者調達に苦慮していたので、農業協力要員の養成と確保が、官民の農業協力における共通の急務であることを三木氏に進言した。そこで、三木構想の取りあえずのスタートとして、農業協力要員の養成、確保を主たる業務とする団体を官民共同で作ることとなり、筆者と渋沢正一氏（当時筆者とともに O T C A 常務理事）とでその準備工作を行うことになった。筆者は農林・外務省の役所方面の根回し、渋沢氏は、当時、経団連会長であった植村甲午郎氏の女婿という関係もあって、財界の工作にあたった。

幸いにして、政府筋では農林省の国際部長であった内村良英氏、財界では経団連常務理事であった古藤利久三氏の積極的な支援により、海外農業開発財団設立のめどが立ち、具体的な設立準備段階に入った。岩田氏は、上記の三木構想の諮問グループのメンバーでもあり、体験に基づく熱帯農業開発のアイディアを出していたが、財団設立にも、積極的な

賛意を示し、設立準備段階になると、その準備事務室としてアジア会館の一室を提供した。さらに、準備事務の専従職員の給与等の諸経費を用立てるなど多大の支援を惜しまなかった。

かくして、1969年に財団法人海外農業開発財団（以下「財団」と略）が発足した。会長には経団連の推薦により、経団連の経済協力委員長の安西正夫氏（昭和電工社長）、理事長に岩田氏が選任された。その後安西氏が亡くなってからは、会長は空席のままで、岩田氏が理事長として最高責任者となった。なお、筆者は設立当時はOTCAの常務理事であったが、財団の理事にも加わっており、さらに、翌1970年のOTCAを退任後は、財団の専務理事に就任して、岩田氏に仕えた。

##### 5. 農業開発事業への執念

財団の事業は前述の設立経緯から、農林省の補助金（半額補助）を受けて行なう人材の確保、養成事業が主軸であった。設立から解散（1974年）までの約5年間に、登録した技術者数は1,000人を超え、確保した要員（財団が抱え要請に応じて政府、民間の海外要員に推薦する技術者）の累計は113人、登録要員または確保要員から現地専門家として派遣された人員の数は延べ170人（政府向け95人、民間向け75人）であった。また、財団がOTCAの委託または財団の経費で開催した国内での研修コース、セミナー等の受講者は延べ数100人にのぼった。

財団の事業には、このほかに、外務省の補助事業や民間からの委託事業、あるいは財団の自己資金による開発調査事業があったが、さらに、1971年からは、フィリピン政府との契約で、同国の米およびメイズの種子増殖プロジェクトに対しコンサルタント・サービスの提供もしていた。

岩田氏の関心は、これら事業のうちでは海外の開発調査事業に最も強く、人材事業の方

はほとんど筆者らが運営する事務局に任せていたが、開発調査については意見を出したり、また、陣頭指揮で自ら現地に行くこともあった。そのうちでも、特に関心の強かったのは、インドネシア領西イリアン開発であった。

周知のように、西イリアンは、インドネシアの中で最も未開発の地域で、人口密度は平方メートル当たり2人という極端な過疎地であるが、鉱産物の埋蔵は測り知れないと言われ、農業的には典型的な熱帯降雨林型の開発ポテンシャルの極めて高いところである。岩田氏は、かねてからこの地域こそ日本が官民一致して開発に協力すべきところであるとの信念を持っていたが、財団の基礎もようやく固まった1972年に、同地域の農業開発計画を立案することを筆者に命じた。この時、氏は、調査費は自分が集めるから、金はケチるなと言うほどの力の入れようであった。

そこで、まず調査の可能性や調査方法などを考えるために、筆者が現地を下見に行くことにしたのであるが、外務省や商社筋を通じて調べたところ、西イリアンへの外国人の立ち入りは、国防省の許可その他のきびしい制限があって、インドネシア政府の関係部局全部の承認を取りつけることは容易でなく半年ぐらいいかかるということであった。ところが岩田氏は「当って砕けよう」ということで、1972年7月に、筆者と職員1名および通訳を伴ってジャカルタに乗り込み、かねてより昵懇であったマリ外相に直談判で、筆者の入国許可を出すよう依頼した。当時、マリク氏は大統領に次ぐ実力者であったから、数日で許可証が交付され、筆者は農業省の担当官を案内役につけて貰い、約2週間にわたって、同島の海岸沿いの農業開発適地を見て歩くことができた。

翌1973年には、農林省の東南アジア三国（タイ、マレーシア、インドネシア）の農業開発調査団の団長として3カ国を歴訪し、筆者もこれに同行した。この調査のときも、インド

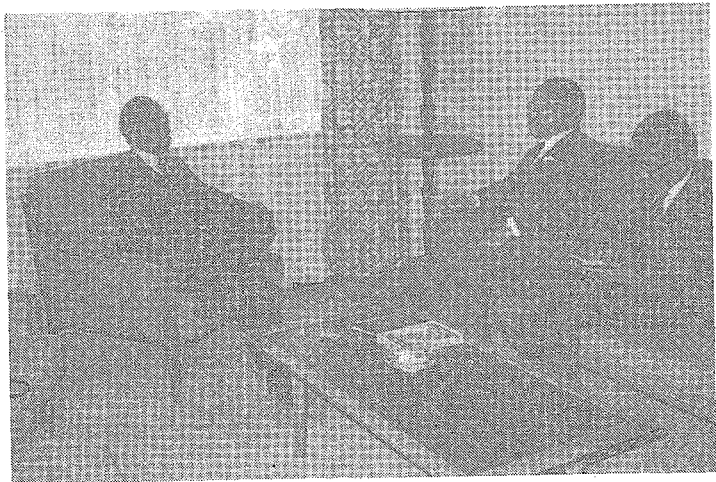
ネシアに最重点を置き、西イリアンも調査地に加えることを希望したが、これは予算と日数の関係で実現しなかった。同国では、総勢13人のチームを分割し、ジャワ、ランボン、南スラウェシ、南東カリマンタン等を調査したが、岩田団長は、ジャカルタでの要人達との会談と、ランボンのミツゴロその他の日本企業の農場を視察し、この調査旅行中どこへ行っても、岩田団長の84歳という高齢に相手は驚嘆した。ジャカルタでは、マリク外相や農業大臣その他の要人と会談したが、ここでも、イリアン開発を持ち出し、また、その数ヵ月後にマリク氏が来日したときも、宿舎の帝国ホテルに訪ねてイリアン開発を繰り返した。同席した筆者も今更ながら氏の執念に感嘆したのであった。

余談であるが、イリアンに執念を持った財界人に小松製作所元社長河合良成氏がある。同氏は1963年に、ニューギニア懇談会を作って、自らその会長になり、岩田氏を常務理事にした。その頃、筆者も河合氏からイリアン開発の抱負をしばしば聞かされた。今も忘れられないのは、たまたま同氏の山中湖の別荘付近を一緒に植物を見て歩いた際に（同氏は山草に興味を持っておられた）、ユウスゲの花の開くのを見ようと、夕暮時に、ユウスゲの前に坐り込んで開花を待ちながらイリアンの話を聞いたことである。岩田氏のイリアン熱が、河合氏から伝染したのか、たまたま志を同じくしたのかは分らないが、今頃は蓮の葉の上に坐って、早朝の開花を待ちながらイリアンを語り合っておられることであろう。

## 6. 財団から協会へ

1974年に、OTCA、海外移住事業団を統合して、新たに国際協力事業団（以下「JICA」と略）が設立されたのであるが、これに伴って、財団の行なっていた人材事業、開発調査、民間支援事業はJICAが行なうことになり、財団はこれら業務をJICAに引き渡して解散することになった。

財団の行なっていた人材事業その他の補助事業は、政府から経費の半額（項目によっては3分の2の補助率もあった）を受け、あとの半額は、賛助会費その他の民間資金で賄われていたのであるから、これをJICAが引き取って全額国費でやってくれるのは、民間としても結構なことであるということで、財団は政府の申し出に従うこととした。しかし、そのとき、岩田氏は2つの条件を出した。第1の条件は、財団の職員および確保要員を、財団在職時より低くない処遇で引き取ることであった。この点は問題なく処理された。第2の条件は、JICAでは行なえない（法律上または實際上）民間へのサービス業務を行なうため、新たに社団法人を作って、これに財団の残余財産を引き継がせるということであった。しかし、これには農林省から強い



1973年に来日したマリク外相（左端）と語る岩田氏（右端筆者）

抵抗があった。つまり、JICA設立に際し、外務省はOTCAと移住事業団、通産省は海外貿易開発協会、農林省は財団をそれぞれ「供出」することになっており、その供出の割合が、新設JICAの役員の振割りやその他各省の勢力バランスに影響するため、「供出」したはずの財団が形を変えて生きているというのでは具合が悪いということであったようだ。しかし、岩田氏の根強い頑張りでこの条件も容れられ、財団の解散と並行して、海外農業開発協会（以下「協会」と略）の設立準備が進められた。協会は、財団からの残余財産および前述のフィリピン政府との契約を引き継いで、1975年から事業を開始した。このようにして、協会が設立されたのは、偏に岩田氏の熱意によるものであるが、そのときの農林事務次官は内村良英氏で、前述の財団設立当時と同省の国際部長として財団の設立に努力、また、岩田氏の南方への情熱を良く理解していたことも幸いしたのである。また、OTCAの会長であった中山素平氏が、「何らかの形で財団の民間サービス機能を残すのがよい」との意見を表明したことも与って力があった。

協会は社団法人であるから、財団とは異なり、会員組織となったのだが、設立当時の法人会員は主として財団当時の賛助会員会社であった。会長には経団連の推薦により、植村甲午郎氏が、理事長には岩田氏が選任された。こういう次第で、一旦解散した財団が協会として直ぐに「復活」したので、「岩田さんはキリストみたいな人だ」とか、「死んだと思った財団が」などと、よく冷やかされたものであった。

設立後の協会の事業の推移については、本誌読者には今更ここで書く必要もないであろうが、役員では、植村会長が亡くなった後は、やはり経団連の推薦で、経団連のインドネシア委員長橋本栄一氏（当時三井物産会長）が就任した。また、筆者は、財団解散とともに、

職員と同様JICAへ移ったが、協会の理事にも選任されていたので、随時協会に来て、助言等をしていた。その後、1981年にJICAの身分を離れ、専務理事として再び岩田氏の下に専従することになった。この年には、岩田氏は既に92歳の高齢であったが、毎日アジア会館に出勤していた。協会の事務所は同じ館内であるが、協会の業務はほとんど事務局に一任し、事務局が意見や指示を求めることも、財団の頃と比べると、はるかに少なくなった。以前には、昼食には大抵経団連の会員食堂へ行き、たまたま来合せている財界人と挨拶や立話をするなど、対人関係の維持を心がけていたし、ときどきお伴をした筆者をその方々に紹介するというような気くばりもしていたが、近年は、昼食も自室でとることが多かったようである。それは、年齢のせいで活力を失ったというよりは、筆者の目には、安心立命というか、達観の境地に達したという感じであった。

事務局に任せられた協会の事業も、JICAの民間支援業務（いわゆる3号業務）の拡大により、開発調査や、それに関連して、会員会社等からの委託業務も増え、設立当初に比べると事業規模は量的には確かに拡大してきた。しかし、協会事業の質や、さらに、その性格については、岩田氏が強い執念を貫いて設立した意図に合致していたかどうか、ついに尋ねる機会を失ってしまったのは残念である。

岩田喜雄理事長略歴

- |      |                                                |      |                                                                                                                           |
|------|------------------------------------------------|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1889 | 長野県更級郡稲里村で出生。                                  | 1956 | カンボジア・キリロム高原建設調査団長として同国を調査。                                                                                               |
| 1912 | 千葉県立園芸専門学校（千葉大学農業部の前身）卒業。                      | 1957 | 財アジア会館創立、副会長に就任。ラオスにて農業開発調査。                                                                                              |
| 1913 | 財南洋ゴムに入社、マレー半島ジョホール・パンチャー農園に勤務。                | 1958 | マラヤ連邦にて農業開発調査。                                                                                                            |
| 1918 | 財南洋拓殖工業の資源調査団長としてカロリン群島へ。                      | 1961 | 海外技術協力事業団創立、顧問に就任。財アジア協会の事業は同事業団に移管された。                                                                                   |
| 1920 | 渡辺婉子と結婚。財日東ゴムのジョホール・レンガム農園支配人に就任。              | 1963 | 東南アジア産業開発貢献の功績により藍綬褒章を授与。                                                                                                 |
| 1922 | スマトラ興業（明治製糖系）のゴム農園支配人、常務取締役役に就任。               | 1964 | フィリピン親善使節団長として、民間代表者とともに産業調査などを実施。                                                                                        |
| 1930 | ボルネオ島にて産業調査実施。                                 | 1965 | 勲三等瑞宝章を授与。                                                                                                                |
| 1933 | スマトラ島栽培協会会長に就任。                                | 1966 | 日本ベトナム懇話会会長代理としてベトナムに行く。                                                                                                  |
| 1934 | 財明治ゴム工業創立、常務取締役役に就任。                           | 1969 | 財海外農業開発財団創立、理事長に就任。                                                                                                       |
| 1936 | シャム（現タイ）国政府国賓として同国訪問。人造ゴム工業視察のため訪独。            | 1972 | 勲二等瑞宝章を授与。                                                                                                                |
| 1937 | 財昭和ゴム創立、常務取締役役に就任。                             | 1973 | 経団連インドネシア委員会農業部会長に就く。                                                                                                     |
| 1939 | 拓務省海南島資源調査団団長として海南島にて調査。                       | 1975 | 国際協力事業団設立（74年）により一部事業が移管された財海外農業開発財団を解散し、財海外農業開発協会を創立、理事長に就任。アフガニスタンを訪問。                                                  |
| 1944 | 財昭和ゴム社長に就任。ニューブリテン島の 카카오園経営に当たる。セレベス島にゴム工場を建設。 | 1976 | 南太平洋会議参加のためニューカレドニア訪問。                                                                                                    |
| 1947 | 財昭和ゴム相模事業所を設置、南方引揚従業員の収容にあてる。                  | 1984 | 4月4日逝去に至るまで、財海外農業開発協会の理事長、財アジア会館会長、財昭和ゴム相談役、財日本園芸生産研究所理事長、財日本シンガポール協会会長、財日本ミクロネシア協会会長、財日本アフガニスタン協会会長、東南アジア関連団体の顧問、理事を務めた。 |
| 1948 | 財日東タイヤ設立、社長に就任。                                |      |                                                                                                                           |
| 1950 | 千葉大学園芸学部同窓会会長。                                 |      |                                                                                                                           |
| 1952 | アジア経済調査会（会長松永安左衛門）発足、農林部長となる。                  |      |                                                                                                                           |
| 1953 | アジア経済懇談会委員となる（外務省）。                            |      |                                                                                                                           |
| 1954 | 賠償審議会委員となる（通産省）。財アジア協会創立、副会長に就任。財昭和ゴム相談役に就任。   |      |                                                                                                                           |

海外農業開発 第101号

1984.

6. 15

発行人 社団法人 海外農業開発協会 橋本栄一、編集人 渡辺里子

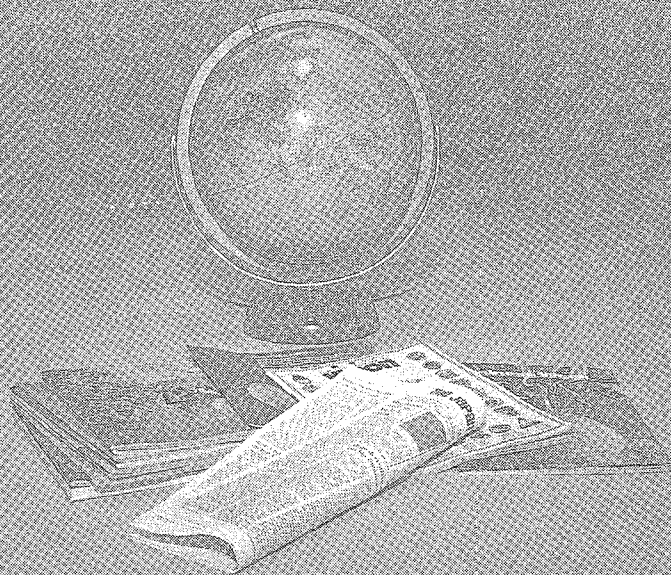
〒107 東京都港区赤坂8-10-32 アジア会館

TEL (03) 478-3508

定価 200円 年間購読料2,000円 送料別

印刷所 日本軽印刷工業㈱ (833) 6971

世界の人々とともに考え、語り合っています——  
明日のこと。世界のこと。



いま世界は、ひとつの転換期を迎えていると思います。経済の動きだけでなく、政治も文化も、一人一人の生活や意識も大きく変わりつつあるのではないのでしょうか……。

こんな時こそ、より多くの人々とともに語り合い、協力しあってより確かな明日への道を探す——伊藤忠商事では国内はもとより、海外においても、一人一人が相互の理解と信頼を深めるように努めています。

 伊藤忠商事

■豊富に描いた実物の写生の掲載  
■熱帯果物の原語一覧表の活用

# 熱帯の果物誌

農学博士 岩佐俊吉著

四六判 定価 2,000円

あなたは熱帯の果物の数をどのくらいごぞんじですか？

以前は熱帯でなければ味わえなかった熱帯の果物・パパイヤ、マンゴ、アボカドなどが、バナナやパイナップルなどとともに店先でみられるようになった。また、近年は熱帯への旅行者や赴任する人が多くなり、関心も高まっている。本書は、熱帯の果物を介してその地に生活する人びとを理解し、さらには果物の足跡や生産とさまざまな利用の仕方をおして世界の歴史と生活が理解される。読んで楽しく、果物を何倍もの楽しさで知ることができるようになる内容である。

〔おもな内容〕 I. 熱帯果物のふるさと 生い立ちと風土、熱帯果物の足跡。II. 熱帯果物の特性。 III. さまざまな熱帯果物 バナナ、パイナップル、ヤシ類、パンノキ、パラミツ、コレンシ、マンゴ、カシュー、ドリアン、マンゴスチン、パパイヤ、グアバ、トマトノキなど25種ほどの果物の生い立ち、生活とのかかわり、食味などの内容。術語の手びきも掲載されている。

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-10 古今書院 ☎03-291-2757 振替東京0-35340

海外農業開発 第 101 号

第 3 種郵便物認可 昭和59年 6 月 15 日 発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS